

知識の定義とイデア論

—プラトン『ポリテイア』と『テアイテトス』をめぐって

田坂 さつき

近年、プラトンの中期から後期に位置する『テアイテトス』において、いわゆる中期イデア論が保持されているのか、破棄されているのかが議論されてきた。『テアイテトス』に先立って書かれたとされる『ポリテイア』には、イデア論の枠組みの中で、知識は「あるものを対象とする (*ἐπὶ τῷ ὄντι*, 477e5)」と規定されている。中期の終わりか後期のはじめに位置すると言われている『テアイテトス』においては、イデア論に明示的に言及されることなく知識の定義が失敗に終わる。この点だけ見ると、この結末は奇異である。『テアイテトス』の否定的な結末に関する伝統的な解釈は、20世紀初頭 F.M.コーンフォードが提示した次のようなものであった¹。彼によれば、プラトンは『テアイテトス』ではイデア論を前提しないと知識の定義が失敗に終わることを示し、イデア論の必要を説いている。第一部に登場するプロタゴラスの相対主義や万物流動の世界観は生成流転を繰り返す現象界においては成り立つが、知識の対象であるイデアについては成り立たない。また第二部第三部の定義については、知識の対象がイデアであるという前提が欠落しているために失敗することが示された。この解釈は『ポリテイア』との整合性を説明しうる有力な説であり、かつては広く支持されていた。しかし20世紀後半、ヴラストスは『パルメニデス』第一部にアリストテレスの第三人間論と同じタイプのイデア論批判を読む²。そこで『テアイテトス』に先立つ『パルメニデス』において、プラトンは既にイデア論の問題に気づき、『テアイテトス』ではイデア論を破棄しているのではないか、という見解が登場する。これに対して、後期の著作『ティマイオス』にはイデア論が登場することが有力な反論たりうる。しかし G.E.L. オーエンは、『ティマイオス』を後期から中期へと移動させるという提案を行い、『パルメニデス』『テアイテトス』以降、中期イデア論は登場しない、と主張する³。

¹ Cf. F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, London (1935), pp. 29-60. esp. 58-59.

² G. Vlastos, "Plato's 'Third Man' Argument (*Parm.*132A1-B2): Text and Logic", *Philosophical Quarterly* 19 (1969), 289-301, in his *Platonic Studies*, Princeton University Press (1973) 342-360.

³ Cf. G.E.L. Owen, "The Place of the *Timaeus* in Plato's Dialogues", *Classical Quarterly* N.S.3 (1953), 79-95; 尚、同論文は彼の論文集 *Logic, Science and Dialectic: Collected Papers in Greek Philosophy*, ed. by Martha Nussbaum London (1986) 65-84 に掲載。他方マルモドーロは、第三人間論型のイデア論問題にプラトンは『ポリテイア』で既に気づき、それに対する対応を示しているという興味深い解釈をしている。Cf. 'Is Being One Only One?' – The Argument for the Uniqueness of Platonic Forms'. *Apeiron* vol. XLI 4, pp. 211-227, 2008.

その結果、『テアイテトス』においてプラトンがイデア論を保持しているかどうかについても再考を余儀なくされ、『テアイテトス』の否定的結末の解釈は、プラトンのイデア論に関する中期から後期への動向の解釈と連動しているとみられている⁴。

近年、『テアイテトス』解釈に関して『テアイテトス』を産婆術という枠組み、あるいは反駁的な対話、探求の手引としての対話という対話篇の様式を重視することにより、イデア論について言及がない理由を説明しようとする傾向がある⁵。しかしこれは、コーンフォードの言うような、相対主義と流動が成り立つ現象界と不動不変のイデア界という二世界論をプラトンが『テアイテトス』でどのように考えていたかに答えることにはならないだろう。

近年、二世界論的なイデア論の前提の下にプラトンが知識論を考えていた事に関する異議申し立てもある⁶。『ポリテイア』では、知識の対象と思いなしの対象を分けて規定する以上、対象の相違が定義と連動しているのは事実である。つまり、世界が違うという言葉もできるが、普遍と個物、それぞれの世界を考えるのか。このように考えると、いわゆるプラトン中期のイデア論、とりわけ二世界論的イデア論とはいかなるものか、ということとも関わる。変化するように見える世界に対してわれわれの知識や言語が如何に

⁴ T. Chappell, *Reading Plato's Theaetetus* (Hackett, 2005) 16-24.

⁵ L.ブラウンは、近年刊行された(J.マクダウェルの翻訳に添えた)注釈の中で近年の解釈について次のように述べている。D.セドレー解釈は、『テアイテトス』にイデア論が隠されていると解する点で、コーンフォードと同一路線にあるとする。セドレーは、ソクラテスの産婆術という観点から『テアイテトス』を読み解く。すなわち、対話相手は、ソクラテスの産婆術により相対主義や流動説に依拠した知識の定義も、真なる思いなしにロゴスを加えても定義が不能になる、というアポリアに陥る。プラトン自身がこのアポリアと向き合い、知識に関する理論の探求に向かうならば、イデア論を産み出すだろう、と。その意味でイデア論は隠されている。一方ブラウンは、『テアイテトス』では M.F.バーニエットの言う帰謬法(ReadingB)が成立しているかどうかにも疑問をもつ。バーニエットによれば、『テアイテトス』第一部は帰謬法によって構成されており、コーンフォードの二世界論的イデア論を前提とした解釈(ReadingA)が論理的に成り立たない。ブラウンによれば、反駁されるのは、「ある」「なる」という言語使用が不可能になる、という極端な相対主義と流動説、つまり個々のものの同一性も失われるような説への反駁だからである。それゆえ、ここでは通常理解されているような穏健な相対主義や流動説、つまり相対化されるものや、流動するものの同一性は認めながらも、「ある」「なる」の使用可能性を認めるという立場は退けられてはいないとする。これはコーンフォードも同じである。Cf. *Plato Theaetetus*, Translation by John McDowell with an Introduction and Note by Lesley Brown, Oxford (2014), p.xvii-xxvi.

⁶ G.ファインは、プラトンの対話編全体の中で、二世界論が示唆されることなく知識論が展開されている箇所が少なくないという。Cf. G.Fine, "Knowledge and Belief in *Republic V*", in her *Plato on Knowledge and Forms*, Oxford (2003) pp.66-67. 彼女は、思いなしから知識へ昇格するいわゆる学習可能性を二世界論が否定することに違和を感じ、イデア論の二世界論解釈の典拠となる『ポリテイア』第五巻の末(475e3-480a13)において、二世界論を読み込む解釈に疑義を呈している。Cf. Fine, *op.cit.*, pp.67-68. ファインの解釈に全面的に従うつもりはないが、『メノン』『テアイテトス』で問題となった「思いなし」から「知識」への移行可能性が二世界論では説明できない、という指摘は重要である。ブラウンも、『テアイテトス』の第三部が『メノン』の探求を引き継ぐ形で展開されなかったことは謎だという。『テアイテトス』第三部の問題は、「思いなし」から「知識」への移行可能性であり、二世界論はコーンフォードが言うほど簡単にこれに説明を与えはしない。『テアイテトス』では、文字や算術などの学習の場面が例にあげられている。論者は、ファインが指摘するような学習可能性をプラトンが『テアイテトス』で検討していると解している。

して成り立つのか、という根本問題にプラトンが向き合っているアイデア論を構築していたことはおそらく間違いなく、松永の仕事はそこを見据えている⁷。我々は対話篇の語り方に注目しつつ、もう一步、プラトンがアイデア論を立てざるを得なかったその地点を探り当てなければならない。本論文は、『テアイテトス』における知識の定義とアイデア論の問題を『ポリテイア』と『テアイテトス』のテキストを参照しながら、「それ自体一であることではない (*οὐδὲν εἶναι ἐν αὐτὸ καθ' αὐτό*, 157a5)」という表現を手がかりに考察する試みである。

I

私が注目したいのは、ソクラテスが、『テアイテトス』第一部で、プロタゴラスの「人間尺度説」とヘラクレイトスらの「運動生成説」の対極にある思想としてパルメニデスを挙げていることである (152e2, 180c7-181b4)。すなわち、「不動なるもの、有の名こそ、万有の世界が持つところの名である。万物は一なるものである。自分が自分自身の中に静止しているだけで、自分がその中を動く場所というものはもたない (180e1-4)」とする一派をあげて、ソクラテスとテアイテトスは、プロタゴラスとヘラクレイトスらの一派との真中に入ってしまった、という (180c7-181b4)。『テアイテトス』第一部では、パルメニデスの思想を取り上げることはせずに、その対極にある諸説をプラトンは検討している。

『テアイテトス』でパルメニデスの対局にある一派について、どのような観点に注目して議論しているのか。プラトンは『テアイテトス』第一部の諸説の関係を説明する時、パルメニデスを除く知者の説として「何もかもそれ自体 (一) あるものはない (*ἐν μὲν αὐτὸ καθ' αὐτὸ οὐδὲν ἔστω*)」という立場に立つ説として、一括している。(152b6-7, 152 d 2-3, 157a7-b1, 183a10-b5)。

論者の『テアイテトス』第一部の解釈をここで簡単に述べる⁸。プラトンは知識の定義を探求するにあたって、まず「知識は感覚である」という定義 (以後「第一定義」と呼ぶ) を検討せずに、プロタゴラスの「人間尺度説」およびヘラクレイトスに代表される「運動生成説」を導入する。プラトンが「人間尺度説」と「運動生成説」とを導入したのは、パルメニデスと対立する立場として第一定義を捉え、同じ立場に立つ「人間尺度説」と「運動生成説」とを合わせて検討する意図があったと論者は考えている。「第一定義」は「人間尺度説」から導出され、「人間尺度説」と「運動生成説」は、パルメニデスに対峙して「それ自体一である」ものを認めないという立場 (以後「それ自体で一である」否定

⁷ 松永雄二『知と不知—プラトン哲学研究序説』、1993、東京大学出版会。

⁸ 拙論『テアイテトス研究—対象認知における「ことば」と「思いなし」の構造』知泉書館 (2007), pp.5-49 を参照されたい。

説と呼ぶ) に立つ。それゆえプラトンは「それ自体一である」否定説に与するという一点において反パルメニデスという立場を一括し、「第一定義」「人間尺度説」「運動生成説」三者がその点で立場を同じくすることを『テアイテトス』第一部前半で論証しているとみることができる。つまり、プラトンは第一部前半の議論を通して、「それ自体一である」という表現の使用を否定する相対主義や生成流転の思想を根拠に「感覚が知識である」と主張する諸説を挙げて、第一部後半でそれらを反駁する手法をとっているのである。

したがって、「それ自体一である」否定説は、プロタゴラスの人間尺度説に従って解釈すれば、「ある」を相対化せずに、限定抜きで使用してはならない、という主張になる。そして、ヘラクレイトスら運動論者の説に基づいて解釈される場合、静止という意味を担う「ある」が排除される。それゆえ、運動論者の説の下では、「ある」の使用が否定され、「なる」の使用が推奨される。そして両説は以下のように「ある」の使用を禁止する。

「あなたは、何かであるとも、どのようなであるとも、正確に対象を規定することができない (152d3-6, 152d8-e1)。」

「『ある』をあらゆるところから排除しなければならないが、習慣と無知のために、『ある』を多く使用することを余儀なくされている (157b1-3)。」

このように、『テアイテトス』でプラトンがプロタゴラス、ヘラクレイトスら運動論者と対峙している問題は、「ある」の限定抜きの使用、とみてよい。

次に、『ポリテイア』と『テアイテトス』で知識が「ある」との関係でどのように扱われていたかを確認する。プラトンは『ポリテイア』で知識を以下のように規定している。

- (1) 知識のほうは、その本性上、「あるもの」を対象とするのではないか。すなわち、「あるもの」がどのようにあるかを知るのが、<知識>の本性ではないかね？
(*οὐκοῦν ἐπιστήμη μὲν ἐπὶ τῷ ὄντι πέφυκε, γινῶναι ὡς ἔστι τὸ ὄν; 477b11-14*)
- (2) 知識とは「誤ることのないもの *τὸ ἀναμάρτητον*」である (477e5-8)。
- (3) 知識のほうは、「あるもの」を対象としてそれに関わる—すなわち、「あるもの」がどのようにあるのかを知るのが「知識」の本性だろうね？ (*ἐπιστήμη μὲν γέ που ἐπὶ τῷ ὄντι τὸ ὄν γινῶναι ὡς ἔχει; 478a6*)。

(1) と (3) はほぼ同じである。(1) から (3) は以下 3 点に要約できる。第一に、知識は「あるもの」を対象としてそれに関わる。第二に、「あるもの」がどのようにあるのかを知ることが知識の本性である。第三に、知識とは誤ることがないものである。これらの規定は、何の論証もなく提示されているので、知識に関する一般的な了解事項だと

思われる。古典ギリシャ語で「ある」という語には、「真である」という含意があり⁹、誤りがない、というのは知識であるための必要条件である¹⁰。この箇所は、『ポリテア』においては、「観ることを愛する者（愛観者）」への説得における合意を取り付ける議論の中に置かれている。愛観者はイデア論を認めないが、彼らが「知っている」のではないとすると怒り出さないように穏便に議論する箇所である。

一方、知識に関する上記の了解事項は、『テアイテトス』にもみられる。『テアイテトス』の第一部でソクラテスは次のように言う。「感覚は、本性上、『あること』に関わり、誤りのないものである、知識がそうであるように *αἴσθησις ἄρα τοῦ ὄντος αἰεί ἐστὶν καὶ ἀψευδὲς ὡς ἐπιστήμη οὐσα*. 152c5-6)¹¹」。これは、『テアイテトス』でも『ポリテア』同様、何の論証もなく言われているので、両者とも知識に関する一般的な了解事項と考えられる。プラトンは『テアイテトス』ではイデア論を前提することなく、知識の定義を試みているとされている¹²。このように、知識に関する了解事項に関しては、『ポリテア』と『テアイテトス』とは共通である。

II

次に、プラトンのイデア論が『ポリテア』ではじめて導入された箇所をみてみよう。以下の箇所は、哲学者とはどのような者かを明らかにする、という広い文脈で「観ることを愛する者（愛観者）」に対比されて、哲学者は「真理を観ることを愛する者」と規定された後に位置する。そして、多くの美しいものを観ることと真理を観ることとの違いを明らかにする際に、当該の議論が提示されている。すなわち、「多くの美しいものを観ることを愛する者（愛観者）」が、端的に「ある」ものではなく「ありかつあらぬ」ものを観ることを愛している、ということ明らかにする過程で、「知識」は端的に「ある」ものを対象として、「思いなし」は「ありかつあらぬ」ものを対象とする、と論が展開するのである。

P1 美と醜は互いに反対のものである以上、それらは二つのものである (*ἐπειδὴ ἐστὶν ἐναντίον καλὸν αἰσχρῶ, δύο αὐτῶ εἶναι*. 476a1-2)。

⁹ Cf. C.H.Kahn, *The Verb Be in Ancient Greek*, (Reidel, 1973).

¹⁰ ファインはこの意味に焦点を当てて、独自の解釈を展開する。Cf. Fine, *op.cit.* 73. n. 12.

¹¹ コーンフォードはこの箇所がイデア論と緊密な関係にあると考えている。Cornford, *op.cit.* 2, 38-39. 他方、チャップルは、この議論は、予め知識というものが「あること」に関わり誤りがないものだ、ということを知らないと成り立たないが、これはソクラテスが自分は無知だと発言していることと矛盾する、という。Cf. T. Chappell, *Reading Plato's Theaetetus* (Hackett, 2005), 57, n.38.

¹² Cf. D.Sedley, *The Midwife of Platonism* (Oxford, 2004) 2-4.

- P2 二つのものである以上、それぞれは一つのものである (οὐκοῦν ἐπειδὴ- δύο, καὶ- ἐν ἑκάτερον; 476a3)、ということにもなるのではないか (476a3-4)。
- P3 そして、正と不正、善と悪、およびそのような類のものについても (καὶ περὶ δὴ δικαίου καὶ ἀδίκου καὶ ἀγαθοῦ καὶ κακοῦ καὶ πάντων τῶν εἰδῶν πέρι) 同じ論が成り立つ。すなわち、それぞれは、それ自体は一つであるけれども (αὐτὸ μὲν ἐν ἕκαστον εἶναι)、いろいろの行為と結びつき、物体と結びつき、相互に結びつき合って、いたるところにその姿を現す為に、それぞれが多として現れるのだ (476 a5-9)。

P3 には、『テアイテトス』でわれわれが注目した「それ自体は一である」という表現が登場する。「それ自体一つであるもの」は相互に結びつき、そしてそれが多として現れることが、ここでのプラトンのイデア論の特徴である。これはおそらく、「それ自体で一である」否定説の対極にあるパルメニデスのいう「ある」とも異なる¹³。「それ自体あるもの」が多として現れるときに「ありかつあらぬ」ものとして現れるとされる。

この箇所を巡って、中期イデア論では、不正・悪・醜をイデアとして扱ってはいない、という点が指摘されているが、同じような議論が『テアイテトス』第一部の末尾にもある。

- T1 ソクラテスに『あなたはどちらの側に（「感覚する」と「思いなす」のどちらに）「あること」を置きますか、「あること」とはすべての事柄と関わっているのだが (ποτέρων οὖν τίθης τὴν οὐσίαν; τοῦτο γὰρ μάλιστα ἐπὶ πάντων παρέπεται.186a2-3) 」、と問われて、テアイテトスは、「私は魂がそれだけで思案する事柄の側に (ἐγὼ μὲν ὦν αὐτὴ ἢ ψυχὴ καθ' αὐτὴν ἐπορέγεται,186a4) 」と答える。
- T2 ソクラテスはテアイテトスに「『似ている』とか『似ていない』とか、『同じ』とか『異なる』というのもそうかね (ἦ καὶ τὸ ὅμοιον καὶ τὸ ἀνόμοιον καὶ τὸ ταῦτόν καὶ ἕτερον; 186a5-6) 。」と尋ね、テアイテトスは「そうだ。」と答える。
- T3 ソクラテスはテアイテトスに「ではどうだね、美、醜、善、悪などは (τί δέ; καλὸν καὶ αἰσχρὸν καὶ ἀγαθὸν καὶ κακόν; 186a9) 。」と尋ね、テアイテトスは「はい、それらについても、魂は、それらがまさにあるところのものを、それら相互の関係において観察することがなかならず最も多いように私には思われます。それは既存のものや現在あるものを将来あるところのものへ関係させて、自己自身のうちに勘考するという仕方で、なのです (καὶ τούτων μοι δοκεῖ ἐν τοῖς μάλιστα πρὸς ἄλληλα σκοπεῖσθαι τὴν οὐσίαν ἀναλογιζομένη ἐν ἑαυτῇ τὰ γεγονότα καὶ τὰ παρόντα πρὸς τὰ μέλλοντα. 186 a9-b1) 。」と答える。

¹³ S.スコルニコフは、パルメニデス的な「ある」とプラトンが提起した「ある」との緊張関係を示し、両者の対比によって『パルメニデス』第二部を解説する。Cf. S. Scolnicov, *Plato's Parmenides*, University of California (2003), pp. 22-39.

『テアイテトス』のテキストと『ポリテイア』のテキストとを比較してみよう。まず、両者とも、美醜、善悪といった、反対概念を取り上げている。第二に、P1では、反対概念を勘考する際に、両者が二つであり、各々が一つである、という確認をしている。

『テアイテトス』の T1 から T3 ではそれには言及されていないが、T1 に先立つ箇所での次のような議論がある。色と音が例に挙げられて、それぞれが一つであり、両者は二つであり、同一性や類似性の確認がなされており、表現はほぼ同じである。

- T0-1 ソクラテスはテアイテトスに「色と音について、その両者について君は次のようなことを、すなわち、はじめに、『(双方が) 双方である』と考えるのではないかね。
(περὶ δὴ φωνῆς καὶ περὶ χροῆς πρώτον μὲν αὐτὸ τοῦτο περὶ ἀμφοτέρων ἢ διανοῆ, ὅτι ἀμφοτέρω ἐστὸν;）」と尋ね、テアイテトスは「そうだ」と答える。(185a8-10)
- T0-2 そして次にソクラテスは、「それぞれ、他方とは異なり、それ自身と同じということではないか (οὐκοῦν καὶ ὅτι ἐκάτερον ἐκατέρου μὲν ἕτερον, ἑαυτῷ δὲ ταῦτόν;)」と尋ね、テアイテトスはこれも認める。(185a11-b1)
- T0-3 さらにソクラテスは、「両者は二つであり、各々は一つであるということではないか (καὶ ὅτι ἀμφοτέρω δύο, ἐκάτερον δὲ ἓν;)」とテアイテトスに問い、テアイテトスはこれも認める。(185b2-3)
- T0-4 そしてソクラテスは、「両者がお互いに似ているか似ていないかを君は吟味することができるのではないかね。(οὐκοῦν καὶ εἴτε ἀνομοίω εἴτε ὁμοίω ἀλλήλου, δυνατὸς εἶ ἐπισκέψασθαι;)」と問い、テアイテトスはこれも認める。(185b4-6)

論者は T0-1 の「ある」は、色や音について記述しようとする前提となる了解事項だと考えている。T0-1 のみに「はじめに」という語が付加されていることや「ある」が双数形であることは、慎重に解されなければならない。これは、それぞれの同一性・差異性・数・類似性を考えることに先立って、「はじめに」色と音との双方が「ある」ことを存在措定しているという意味にとるべきである。つまり T0-1 は T0-2 から T0-4 よりも論理的に先行しているのである。このような意味で「(双方が) 双方である」と措定し、それぞれの同一性・差異性等を把握することが、ここで問題になっている。論者はこれを「対象把握」と呼ぶ。それゆえこの箇所の「ある」は、述定を表示してはいない。この箇所で問題になるのは、むしろ、述定が成立する前段階である。例えば「色を記述しよう」とする際に了解していなければならない色の「あること」の了解が問題になっている。このような了解がなければ、色を記述する述定文を作成することはない以上、「色」の存在措定は、述定を行なう前提条件である。そして、「色」と「音」とをそれぞれ異なる別のものとして対象把握していなければ、人が“色”と“音”という表現を的確に用いて、個々の色や音について語ることはできない。しかしこれは、述定そのものではない。

これは『テアイテトス』第一部の最後にある有名な「共通のもの」を導く議論である。

色が色であり、音が音であり、一方は他方とは異なり、それぞれ一である、という議論から、硬さ柔らかさ、正不正や美醜まで議論が進展する。ここで「同じ」「異なる」「等しい」「似ている」という概念間の確認作業がなされており、「対象把握」を確認する作業がなされている。ここでの「ある」の使用は『テアイテトス』第一部のここまでの議論を踏まえると、プロタゴラスの相対化された「ある」や流動論者の「なる」と対比して使用されているとみることができ、プラトンは相対性や流動性のない「ある」の使用を示していると考えられる。この「ある」の用法は、『ポリテイア』第五巻でイデア論を語り始めるT1にある。

第三に、『テアイテトス』第二部(188a1-200c6)では、T2にあるように類似性や同一性に関わる判断が例示されて、偽なる思いなしが同定の誤りとして一般化して議論されるが¹⁴、『ポリテイア』の中にも、類似性や同一性の判断と偽なる思いなしと関係付けて、哲学者と愛観者の区別を思い違いの有無とする箇所がある。

P4 (夢を見ているということは)何か似ているものを、そのまま似像であると考えずに、それが似ているところの当の事物であると思いをすることではないかね (*τὸ ὁμοίον τῷ μὴ ὁμοίον ἀλλ' αὐτὸ ἡγήται εἶναι ᾧ ἔοικεν*;)。

P5 それ自体とそれを分け持っているものとを共に観てとる能力を持っていて、わけ持っているものの方を、元のもの自体であると考えたり、逆に元のもの自体を、それを分け持っているものであると考えたりしないような人 (*καὶ δυνάμενος καθορᾶν καὶ αὐτὸ καὶ τὰ ἐκείνου μετέχοντα, καὶ οὔτε τὰ μετέχοντα αὐτὸ οὔτε αὐτὸ τὰ μετέχοντα ἡγούμενος*) (このような人は目を覚まして生きていると思われる)。

『ポリテイア』では、この哲学者と愛観者の区別が、「知識」と「思いなし」の区別へと繋がっている。それゆえ、取り違えを偽なる思いなしの典型とする『テアイテトス』第二部と通じるものがある。特に、愛観者が自分の過ちに気がつかない状態であり、『テアイテトス』第二部でも偽なる思いなしを持っている本人は間違っていると思っていないという点に焦点を当てて、偽なる思いなしを解析している。

第四に、プラトンは『ポリテイア』で「思考 (*διάνοια*)」を「ある」を志向する主体とその状態を説明する語として用いており(476b7)、T0ではその動詞形「思考する (*διανοεῖσθαι*)」を用いている。一方『テアイテトス』の「思考する」は、第一部末尾では、「感覚する」と区別された感覚器官から独立の魂独自の活動とされ、第二部では、魂がそれ自体で行う自己問答としての思考活動と定義されている(『テアイテトス』180e4-190a8)。

¹⁴ 『テアイテトス』 188b3-c4, 189b12-c4, 191e6-195b8. Cf. J. McDowell, *Plato's Theaetetus* (Oxford, 1973), 194-195.

このように両対話篇におけるプラトンの思索は共通点が多い。『テアイテトス』では、イデア論に言及がないまま知識の定義に失敗したが、『ポリテイア』では成功している、とされ、『テアイテトス』におけるプラトンのイデア論に対する態度が問題にされているが¹⁵、これまで見てきたテキストにおいては、両対話篇の共通点は多く、『テアイテトス』でプラトンの態度が大きく変わったとは思われない。問題は、二世界論的イデア論をどのように解するか、とみることもできよう。

III

ここで、プラトン中期イデア論を示唆するテキストを確認してみよう。中期『パイドン』をみてみよう。

Ph1「だがしかし、他をはなれて、魂がみずからにおいて考察するときには、かしこ、純粋で永劫であり、不死であり不変であるものへ赴き、さながらそのようにあるものとの同族性を証するがごとく、まさに魂がひとりそれ自身に帰り、それが許される時には、つねにかのものと共にあり続けるのである¹⁶。(ὅταν δέ γε αὐτὴ καθ' αὐτὴν σκοπῆ, ἐκέισε οἴχεται εἰς τὸ καθαρὸν τε καὶ αἰεὶ ὄν καὶ ἀθάνατον καὶ ὡσαύτως ἔχον, καὶ ὡς συγγενὴς οὔσα αὐτοῦ αἰεὶ μετ' ἐκείνου τε γίγνεται, ὅταν περ αὐτὴ καθ' αὐτὴν γένηται καὶ ἐξῆ αὐτῆ. 79d1-3)」

ここでも、『ポリテイア』『テアイテトス』と同じく、魂が自ら考察する事柄として「純粋で永劫であり、不死であり不変であるもの」が置かれている。プラトンの知識の定義に関する思索が『テアイテトス』で劇的に変化したという証拠は見いだせず、むしろ、プラトンは中期イデア論を構築した時から大きな変化はないと思われる。

また『饗宴』のディオティマの話の中に、『テアイテトス』の運動生成説を思わせる箇所がある。まず、個体の身体状態に関する同一性を否定する(207d6-e5)。人間は子どもから老人になるまでの間、同一人物であると語られる。たとえ一時のあいだですら、その身に同一のものを保っているわけではないのに、同一人物と呼ばれる。実情は反対に、その毛、肉、骨、血など身体に至るところで、さまざまな消滅を受けながら不断に新しくなる。

¹⁵ チャップルは先行研究を整理しているが、粗雑なところがあり、マクダウエル的位置づけは誤っていると思われる。Chappell, *op.cit.*, 16-24.

¹⁶ 翻訳は岩波全集松永雄二訳を参考に「ある」という訳が生きるように一部を修正した。『プラトン全集 1』 p.230 を参照。

これに引き続き、魂の状態についても、同一性を否定する（207e4-208a6）。それぞれの人の習性、性格、意見、快樂、恐怖などは、一つとして、一度たりとも同じ状態にあったためしはなく、その一つが生まれれば、他は滅びるといふありさまなのだから。これは知識の場合も同じで、わたしたちの持つ様々な知識は、その一方が生まれれば、他方は滅びるといふありさまである。これに対してディオティマは、人間は、知識の忘却を避けるために習熟暗記に努めるという。そのような永遠にあり続けるものを希求する人間の営みが、われわれの知識を支えている、と。

つまり、われわれの言語で同一のものとしてとられているのは、実際に現象が同一の状態にあることを根拠にしているわけではなく、同じ人と呼んでいるわれわれの思考が基盤になっている。そしてディオティマによれば、それは、われわれが永遠にあるものを懂れ、それを希求していることに基づくという¹⁷。いずれにしても、同一性の根拠は生成変化する現象の側にあるのではなく、われわれの思考の側にある。これは『テアイテトス』第二部で、共通のものはわれわれが思いなすことのうちにある、とされたことに符合する（184b7-187a8）。

再び、『ポリテイア』の第五巻でイデア論が語り始められる場面（475e3-480a13）を思い起こそう。「多くの美しいものを観ることを愛する者（愛観者）」が、夢を見ている人と例えられており、彼らが真実を知らないことは認めなければならないといわれていることに注目したい。プラトンにとって真実とは、イデア論を認める論者からの世界解釈である。二世界とは、いわば、夢見ている人の見ている世界と、目覚めている人が見ている世界であり、彼らを目覚めさせるのが、ソクラテスをモチーフとした洞窟帰還した哲学者の役割であり、魂の向け変えの仕方が6巻7巻で中心に論じられる。つまり、夢を見ている人が目覚める可能性、すなわち、多くの美しいものを観ることを愛するのではなく、真実を観ることを愛する、という魂の志向性、あるいは魂の向きの変化が起こるのであれば（それは簡単ではなく、稀有なことだとしても）、「思いなし」が「知識」へと昇格する可能性があることになる。これは、『メノン』や『テアイテトス』のように、「思いなし」にロゴスと加える、というような仕方で知識にいたろうとする試みでは到達できない。『テアイテトス』第一部末尾の議論で、共通のものについての思考活動が例示され、感覚の側に知識がなく思いなしの側にある、とされる際に後者には長年の苦勞と教育の必要性が示唆されている（186c4）。『ポリテイア』では「知識」の存在を認め、それに向かうという態度、すなわち魂の志向性、向きの転換を主題にしている。『ポリテイア』のようなイデア論が『テアイテトス』において保持されたとするならば、セドレーやバーニエツトが言うように『テアイテトス』を哲学教育として読む方向は考慮すべきだと思う。

¹⁷ この箇所については、R.E.アレンは生殖活動が種の保持のためになされる、というアリストテレスの目的論を読み込むが、『饗宴』の中では種の保持という生物の営みよりは、個々の人が「永遠にあること」を希求する愛の営みとが結ばれていると見るべきであろう。Cf. R.E.Allen, *The Symposium*, Yale University Press (1991), pp.73-76.

さらに、今回は深く立ち入れないが、『パルメニデス』第一部のヴラストスの第三人間論に関する議論は、テキストと正確には対応していない。ヴラストスはテキストから定式化に際して正確を期しているとする一方で、テキストには述語づけが「思われる」「見える」という各人の思いなしの文脈の中での判断であるにも拘らず、それを外している¹⁸。各人の思いなしの文脈で「ある」を対象把握において使用するというのは、『テアイテトス』第一部の最終議論で明らかにされ、第二部まで引き継がれた、というのが論者の解釈である。『パルメニデス』第二部で頻出する述語は、「同じ」「異なる」「等しい」「似ている」であることを考えると、アイデア論と同一性差異性の判断は深く関わっていると思われる。

「それ自体一である」否定説は「それ自体で（一で）あるもの」つまりアイデアそのものを立てることを否定する思想であることは、プラトン『パイドン』『ポリテイア』をみる限り明らかである。すると『テアイテトス』第一部の「知識は感覚である」という定義は、アイデア論反対論者が、「ある」の使用という観点から提示したアイデア論批判といえる。プラトンが直接標的にしているのは、極端な流動論者の説やプロタゴラスの説そのものの成立可否ではなく、それらの説が前提している「ある」の用法であり、それに基づいたアイデア論批判であろう。したがって、プラトンが意図しているのは、相対性や流動性ゆえに「ある」の使用を認めないという立場との対決になる。

『テアイテトス』では、「色は色であり、音ではない。」という言明において、なされている対象把握の確認文は、『テアイテトス』第二部以降で登場する同一性言明へと展開し、『テアイテトス』の第二部と第三部末尾では、「テアイテトスはテアイテトスであり、ソクラテスではない」という「ある」の用法を事例に定義が破綻する。このように、同一のものとして捉える思考活動が、相対主義や流動から逃れられるのか、という問題でもある。プラトンは『テアイテトス』において、プロタゴラスや運動論者のように「ある」の使用を禁止することとも、パルメニデスの「ある」の使用とも距離をおき、文字通りその真中に来ているといえるだろう（183e3-184b2）。

IV

『パルメニデス』第一部では老パルメニデスと若いソクラテスがアイデア論を検討し、『テアイテトス』では、自分たちがパルメニデスの説と流動説論者の真ん中に来ってしまったという。そして「ある」など思考の対象になる共通の事柄を立てる。さらに『テアイテトス』末尾で知識の探求が破綻した後で、テアイテトスには産むものがないことを確認する。その翌日の設定で、『ソフィステス』217c1-7では、老パルメニデスと

¹⁸ Cf. G.Vlastos, "Plato's 'Third Man' Argument (*Parm.*132A1-B2): Text and Logic", *Philosophical Quarterly* 19 (1969), 289-301, in his *Platonic Studies*, Princeton University Press (1973), p.348,350.

若いソクラテスの対話を示唆しつつどのような探求方法を探るかをエレアの客人と論じ、「分割法」という探求の道筋を定める。そこで最後に『ソフィスト』の冒頭、老パルメニデスと若いソクラテスとの対話を示唆する記述の直後に、次のような記述がある。

「私と君とが共通にもっているのは、ただその名前だけであって、われわれがその名前と呼んでいる当の事柄については、おそらくわれわれは、めいめいが自分だけの勝手な仕方
で了解しているのかもしれない。けれども、およそつねに何ごとにつけても、それを規定するロゴスを離れて、ただ、名前についてだけ合意しているべきではなく、むしろ、ロゴスを通じて当の事柄そのものについて意見の一致をみるようにしなければならない。
(218c1-5)。」

周知のごとく、『テアイテトス』に続く設定の対話篇『ソフィステス』『ポリテイコス』では、分割法という手法のもとにわれわれの言語理解を相互に確認していく仕方で探求が継続する。これは、われわれの言語を成立させている対象把握を明らかにする営みであり、『テアイテトス』のアポリアに対する新たな探求方法とみることができる。

このようにみる限り、『テアイテトス』における知識の定義の探求は、プラトンが「それ自体（一で）ある」という言語を、現れに対してわれわれの「ありかつあらぬ」という言語を使用する場面から切り出していく作業とみることができる。そしてこれは、『ポリテイア』が共有している問題であるが、それぞれの対話篇の語り方の中で、別様に現れている¹⁹。少なくとも『テアイテトス』を境に、イデア論を破棄して新たな哲学を構築する方向にプラトンが向かっているとは言えない。

むしろ論者には、中期イデア論というものが、二世界論という枠組みの中で矮小化されていることに問題があるように思う。アリストテレスの功罪もあろうが、例えば『第七書簡』における哲学的脱線の部分には(342a7-344d2)、『パルメニデス』『ソフィステス』を思わせるような哲学の要約はあるが、二世界論への言及はない。プラトンは、自説をよく理解していないまま要約して本を書く、ということに不満を漏らしているが(341b3-5)、二千年という時間の隔たりをもっているわれわれも、そのようにならないようにプラトンのイデア論を正確に読み解く努力を続けるべきだと自戒を込めて思う。

¹⁹ この問題に対して、セドレーは興味深いことを指摘する。『ポリテイア』においてイデア論への言及は比喻として語られる。つまり、理想国の建設という具体的な議論の文脈とは異なった語り方なのである。『テアイテトス』においても同様に、知識の定義という具体的な議論に対して、脱線箇所において世俗的な生と哲学者の生との対比のなかで「神に似る」という表現が登場する。つまり、形而上学的な語り方と、対話篇のテーマに沿った具体的な議論との語り方が区別されている。セドレーはプラトンの議論を対話篇の語り方に注目し、イデア論の言及のされ方を丁寧に分析する必要を説き、対話による探求という重要な視点を示しているように思われる。Cf. David Sedley, “Socratic intellectualism in the Republic’s central digression”, in the *The Platonic Art of Philosophy*, edited by George Boys-Stones Dimitri el Murr and Christopher Gill, Cambridge (2013), pp.85-86.

後記

発表後、土橋茂樹氏の司会の下でたくさんの有益なご質問やご指摘をいただいた。幾つかの論点にまとめると以下のとおりである。

一つは対象把握についてである。渡辺邦夫氏からは、長年の修練によってはじめて習得できると言われているような述語と感覚について語る述語とは随分異なるにもかかわらず、述定以前の対象把握をすべて一括するのはミスリーディングではないか、というご指摘をいただいた。それについては、本発表では、感覚について述べる時に、述定とそれ以前、という形で対象把握を切り出す場面について論じた。感覚について述べる述語と、有用性などについて述べる述語とは違うことが異なることはプラトンもテキストで明確にしている。これに対して渡辺氏は、ある種の述語については、対象把握できているかどうかは明確でないものもあるのではないかと、それがテキストの「ちょっとまで」とソクラテスが制する場面に現れていると考える。

二世界論については、ファインは明確に定義してから論じているので、田坂もきちんと規定してから論じるべきではないか。ファインの世界論理解とそれについての対応は注に記しているが、一般に理解されているところに立脚して論じたところは確かに曖昧であったと思う。川島彬氏からもファインの解釈への態度について質問をいただき、注では書ききれない点について説明を補う機会を頂いた。

さらに、『饗宴』『ソフィスト』などのテキストを挙げて対比している論じる点について、納富信留氏と今井知正氏からは、以下のような問題点をご指摘いただいた。それぞれのテキストが置かれている文脈が異なるために、当該のテキストが置かれている議論の文脈を明確にして、異同を正確に論じる必要がある、と。今井知正氏からは、アイデアがそれぞれ異なっているということと、色と音とが2つである、という対象把握とは随分異なった位相の議論である、と。にもかかわらず、『ポリテイア』の引用箇所と『テアイテトス』第二部の対象把握との違いがあまり見えないような形で議論しているが、それぞれの対話篇の相互関係や相違点を明確にすべきである、というご指摘をいただいた。確かに『ポリテイア』の引用箇所はアイデア論を受け入れない愛観者に対して言葉を選んで説得を始める箇所なので慎重に解すべきであり、『テアイテトス』の対象把握を直接重ねることには無理があることは承知しているので、その点は明確にすべきであった。栗原裕次氏からは、『ポリテイア』と『テアイテトス』の違いを明確にするのは『パルメニデス』なので、それについての考えを聞かれた。特に「一である」「ある」について『パルメニデス』を通して、「一ありとすれば」という前提を立ててアポリアに陥っていくギムナシアを通して、『テアイテトス』に至る道筋を明らかにすべきだ、というご示唆もいただいた。

田中享英氏からは、田坂のアイデア論解釈はいわば状況証拠で、プラトンはエイドスや分有などの中期アイデア論言語を使用していない、その点についてはどうか。これに対しては、

『パルメニデス』をきちんと分析できていないので、中期イデア論言語の「ある」に対してそれ以降のような態度をとったかを明らかにしなければならないと考えている。

眞方忠道氏からは、井上忠先生の根拠とのイデアイなどを思い出す、発表者はどう考えるか、という質問を戴いたが充分にお答えすることができなかった。

中畑正志氏からは、イデア論との関係で、流転説が『テアイテトス』で明確に否定されていることについての解釈を問われたが、論者は、『テアイテトス』では、流動説が否定されているのではなく、流動説が第一定義を導出しない、という証明が提示されている、と解している、とお答えした。

高橋久一郎氏は、対象把握と数的な把握が緊密な関係にあると思われるので、流転説に対しては、数的な把握、対象把握が出来るか、という問題になるのではないか、という示唆をいただきつつ、『ポリテイア』で知識の定義が成功している、ということの意味についてご質問いただいたが、これは『ポリテイア』では知識は「ある」ものの関わる、という規定があるが、『テアイテトス』では知識の定義に失敗したという形式的なことのみに、内在的な問題を取り上げるに至っていないとお答えした。

以上、本論文の不十分な点やチャレンジしようと思っていたものの展開できなかった重要な論点を的確にご指摘いただき、今後の研究に向けて貴重なご示唆をいただいた。拙い論文をお読み頂き、また発表を聞いていただきコメントを下さった方々に心からお礼を申し上げます。